

第39回全日本少年サッカー大会

第3位・グッドマナー賞

12月25日(金) 15:30～開会式 鹿児島文化ホール

12月26日(土)

予選リーグ 第12組

第1試合 兵庫FC 2-2 鹿島アントラーズ

緊張感からだろうか、体が動いていない。ボールばかり見て、周りを見ようとしない。ミスが目立ち、コーナーキック3回目。ヘディングシュートがバーに当たり跳ね返りを、頭であわされる。劣勢が続き、連続失点。ベンチから何を言っても修正できない状況が続く。恐れずボールを持てる坂本を送り出した。坂本の、ドリブルからのパスがチームに少しずつ、落ち着きを作った。

ハーフタイムでは、

「これだけ悪い内容で、2失点は上出来かもしれない。クリエイトなら5点は取られていた。」
ボールを持って時間を作りチームに余裕を与えてくれる選手。そんな期待を持って池松をグラウンドへ送り出した。DFラインとGKの間に入ったパスを「イケヤン」が相手選手に押されながらもボレーシュート。やっと、選手の目が輝きだした。数分後、宮内の強烈なミドルシュートが決まり、同点に追いつく。これで何とか、決勝トーナメント進出のめどがつく。子供たちの顔も、いつもの顔に戻っていた。2点ビハインドの状況から同点に持っていった精神力は立派。

第2試合 兵庫FC 4-3 飛松SC

グランセナ新潟に3-0で負けていた飛松SC。ある理由で、宮内と菅原を登録選手から除外。ベンチの外からの応援とした。チームは緊迫感漂う雰囲気の中、試合スタート。開始早々、ゴールを決め追加点。ここから、ベンチの選手を投入。しかし、飛松の猛反撃を受け3失点。やはり、全国に出てくるチームは強い。少しの気の緩みが、最悪の結果を生んでしまった。これは私の責任。残り時間は10分。打つ手が上手くいかず、流れは相手チームが握っている。残り5分、池松を右サイドに戻し、彼の突破に期待。やはり、「イケヤン」がチームを救ってくれた。右サイドからフリーの選手にセンターリング。さらに終了2分前、左からのこぼれ球を、右足アウトサイドで見事に流し込んだ。

この勝利で勝ち点4。決勝トーナメントに残るには、勝ち点3がほしい。鹿島アントラーズは、間違いなく最終戦勝利するだろう。勝ち点で並ぶが、決勝トーナメントに残るには、大量得点が必要。そんな状況をお子たちは、十分認識していた。

12月27日(日)

第3試合 兵庫FC 6-0 グランセナ新潟

朝の散歩から、選手は集中していた。1位しか決勝トーナメントに進めない現実を知っている。得失点差で2位になれば、それで終わってしまうこともある現実を知っている。だから、大量得点で勝たなければならない。

開始早々、右サイドからフリーの選手(久世)にスルーパスが通り、見事にゴール。

2点目は、左サイドからのクロス菅原がゴール。3点目は、右コーナーキックを加古が頭で合わせてゴール。4点目は、右サイドからのクロスを田中が押し込みゴール。5点目は、相手のクリアボールを菅原がミドルシュート。前半終了時点で隣の試合会場、アントラーズは、0-0。

まだ安心はできないことを伝えたが、選手は1位通過の可能性が高いことを認識しているようだった。後半、少し気持ちが緩んだのか、加古の1得点だけ。しかし、立派な戦いだった。窮地に追い込まれた厳しい状況で、このサッカーができる。どんどん成長している選手を見た。

決勝トーナメント

1回戦 兵庫FC 4-0 ACジュニオール

グランセナ新潟との試合をスカウティングしていた対戦相手。同じホテルで宿泊していたチーム。とても立派な生活態度は、尊敬に値する。しかし、我々もそれを上回る選手を育ててきたつもり。互いに意識し合い、素晴らしい試合をしてほしかった。大接戦を予想していたが、ほんの少しのことが、大量点につながった。

長身のエース三枝がドリブルで相手DFを切り裂き、ハットトリック。久世の賢さが光った試合でした。このACジュニオールは、中学生のチーム宮城バルセロナで香川選手が育ったチームです。一人一人、個人技の高いチームでした。

この日の選手は、前日とは全く違ったチームに育っていました。選は、いろんな経験を積んでここまでやってきた自信があったと思うのですが、やはり全国大会の緊張感は、今までのそれをはるかに上回るものだったのでしょうか。この経験は選手の将来に大きく影響するでしょう。

12月28日(月)

決勝トーナメント

2回戦 兵庫FC 2-1 サガン鳥栖

ベスト4に進むためには、この試合を勝たなくてはならない。過去3度、ここで負けている。この壁を破ることが、我々の責任。

昨年夏、『目標は日本一』ははっきりと子供たちに宣言し、ここまで来た。ベスト8の壁を破れなかった大きな原因は、兵庫FCに高さがなかったこと。コーナーキックで大きな選手にヘディングシュート。小さな選手には、どうしようもない現実。しかし、この学年は、三枝という大きな選手がいた。「高さで失点しなければ、何とかなるぞ。」そんな思いから出た目標だった。

選手の目は輝いていた。自信に満ちていた。「やってくれるぞ。」試合開始から、互いの良さを出し合う好ゲーム。開始10分、右サイドから切れ込んだ三枝の左足が爆発。左サイドポストをたたいてボールはゴールの中に吸い込まれた。ほしかった先制点。そして、2分後、三枝からのクロス菅原が合わせて追加点。勝利が見えてきたが、誰も口にはしない。サッカーの厳しさを知っている選手たち。予想通り、後半は緊張感と相手チームの気迫あふれるプレーに、ミスが目立つ。9分、相手チームのスーパーゴールで失点。ここからが長かった。辛く厳しい10分、選手は耐えて勝利をつかんだ。

準決勝 兵庫FC 0-3 レジスタFC

鴨池総合運動公園陸上競技場メインスタジアム。青々と茂る芝生。電光掲示板には、『兵庫FC』の名前が。まるでプロチームの試合が始まる雰囲気。我々の実力を上回る相手チーム。厳しい状況が続くことは予想していた。サガン鳥栖の試合でかなり体力を消耗していることも。そんな中で、精一杯戦ってくれた。不本意な失点で先制され追加点。兵庫FCの良いところを発揮できずに試合が流れていった。4泊5日。この経験を積んでいない。最終日には、体調を崩す選手も。全国大会で、普段通りの力を発揮させる準備をして望まなければ、簡単には優勝できない大会であることを思い知らされた。

目標は達成できなかったが、選手は、この5日間で素晴らしい成長を遂げてくれた。選手の背中を押してくれたのが、子供たちへのご両親のビデオレター。

そして、声の限りを出して声援してくれた、「兵庫FC応援団」苦しいときに、あの声援が、子供たちの足を動かしてくれたと思います。チームは第3位でしたが、応援団は、「日本一」です。本当に有り難うございました。